
魔女騎士

瀬田双樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女騎士

【Nコード】

N0621X

【作者名】

瀬田双樹

【あらすじ】

かつて迫害された魔女を絶対を守る最大の味方——「魔女騎士」は、私にも現れるだろうか？
そう考えながら、祖母と安穏な生活を送ってきた私の日常が、変化の兆しを見せる。

魔女、誰が為に在るのか。 (前書き)

お粗末な設定が盛りだくさんです。

魔女、誰が為に在るのか。

夢もロマンもへったくれもない、ボロボロな家に——夢物語を語る人物がいる。

昔々の、お話だ。

「あの人はね、私を守ってくれたんだ」

そう、嬉しそうに語る祖母に曖昧な笑顔を返す。きっと続くのは何時もの台詞であろうから。「何時か貴女にも、私と同じように魔女騎士が現れる」——と。

この地とは別の地で「魔女」は迫害の対象であった。人とは些細な違いを気にして、少数派を侮蔑する。

「魔女」は何も悪の魔法使いとか、不老不死とかそんな大それた存在ではない。確かに精霊に愛され過ぎている為、自然の力も彼らを介して借りる事は出来た。しかし、精霊と接触出来る以外は——葉の調合に優れた、ただの一般人だったのである。

そんな「魔女」を恐れ、魔女狩りなるものが行われる。これに精霊は怒り狂ったが、彼らは個人の感情で人間に直接干渉は出来なかった。その為、神に願った。

『我々の代わりに魔女を守れる存在を！』

願いが通った結果、神がそれぞれの魔女に合った人間へ神託し、超

！強い「騎士」へと変化させた「絶対に魔女を守る」存在こそが――「魔女騎士」。

なんつーか、魔女狩り行ってる人間に神託下ったらどうすんのよって話だ、が。ところがどっこい、元から魔女に対して変な感情を抱いていない人間に神託は行くらしい。

魔女は女しかいないが、騎士は男女どちらも有り得るらしい。現に、祖母の魔女騎士は女性だ。…二代目の騎士だが。

あ、「魔女」の血に連なる者である私も、魔女。だからこそ何時か現れる、と言われるのだ。

私を理解し、盾となって守る魔女騎士、が。

今の時代は、魔女狩りの悲劇も忘れ去られたような…平和な時代である。何十年前前にこの地の国王が病に臥せった際、特効薬を勇敢な魔女が届けた事から平和が始まる。国王は魔女の行いに感動し、保護と友好を示す。周りの国は反対したみたいだし、精神操作の薬を盛られたとか噂になったらしいが。

まあ、それでも今の今まで平和な暮らしを与えられている。これも勇敢な魔女グレッタ――祖母のお陰である。

そんな偉大なる魔女の孫だから、今まで私に魔女騎士は現れなかった。祖母がいれば私は守られたからだ。

だが、祖母もいよいよ年となって自分一人でも立たねばならない時が近い。何時までも祖母の名前に胡座をかくのもね…。

立ち上がった私に、無言で行き先を尋ねる祖母の瞳ががち合った。

「薬草探してくるよ」

鎮痛作用のある薬草が尽きていた、と思ったから。心配して自分の魔女騎士を派遣しようとする祖母をなんとか説得し、家の付近の植物を探る。

しかし、目的の物は見当たらない為に少しか家から離れる。その判断が間違いだと、気づいたのは――。

「居たぞ！魔女だ！」

不穏な台詞と共に、意識を強制的に失わされてからだった。

魔女、誰が為に在るのか。(後書き)

展開は早いです(予定)

魔女、彼らと出会う。(前書き)

彼ら、即ち複数。

魔女、彼らと出会う。

痛い。頭がじんじんする。

でも、この布団は最高に柔らかくて素晴らしい。いつから祖母はこんな布団を買ったのか。…ん？

どケチ…いや、儉約家の祖母がこんない布団を買ってくれる訳がない。

異常さに気づいて、意識が戻ってくる。

「——が本当に？」

「はい、——魔女——である者かと」

「ならば、——の」

…魔女。うつすら聞こえてきた単語に、背筋が冷えていく。私を「魔女」と知っていて彼らは連れてきたのだ。”何か”の為に。

魔女狩りするのなら、こんな柔らかい布団に寝かせる以前に意識が無い時に…殺る。ならば、他に目的があつての事であろう。非合法な遣り方には納得いかないが。

…もう少し耳を澄ましてみよう。

「俺はお前を誇りに思っている。力は使うべきものだ」

「…有り難き御言葉ですが…、」

声は両方とも男のものだ。且つ、何と無く若い気がする。って、あれ？どうして話し声が止まったんだ？

「クロード様、起きています」

「何？本当か」

「はい、呼吸の感覚が変わりました。覚醒は間違いないかと」

沈黙が部屋を支配した。

：暫く我慢したが耐えきれなくなった為、身を起こす。

目を開けて見れば、キングサイズの素晴らしい布団がある。そして、私を静かに見つめる二対の瞳にも気付いた。

一人は草原のような青々とした緑眼、もう一人は溶岩のような紅の瞳。尊大なしゃべり方と畏まった方、どっちがどっちだろうかとぼんやり考えて、気づく。

「…此所は何処？」

普通の民家には有り得ない間取りの広さと、キングサイズベッドが物語る。

お偉いさんの厄介事に巻き込まれた、と。

私の問いに緑眼の人の方が答えようと口を開いた瞬間、

「シュトビネー領の領主の館です」

言わせるまでも無い、と紅の瞳の方が淡々と告げた。

彼はすらっとした長身に、サラサラな銀髪を首の後ろに結っている。そして、重そうな鎧をつけた騎士風の男。：こちらが、畏まってる方のようなだ。

しっかしさー、（多分）主の発言を遮るってのは不味いんじゃない？と思って、尊大なしゃべり方の方を見れば、：八の字眉毛をしている。視線に気づいてか、彼は表情を正して私に向き直った。

「俺はクロード・シュトビネー。シュトビネー領の次期領主だ。こっちは護衛騎士のゲオルグ」

騎士風の男――ゲオルグさんが騎士の礼をとった。

礼が終わったのを見計らってクロードさんが、ここからが本題とばかりに…口の端を上げる。

「魔女グレタ。手荒に連れてきた無作法を許してほしい。…願いがあるのだ」

まるで「出来るだろう？ いや、出来るよな。魔女なんだから」と言いたげな挑戦的な表情に、カチンと来る。

勝手に拐ってきた挙げ句、願いを叶えろ？…ふざけんな！ お偉いさんは自己中な連中が多いんだね！。

シュトビネー領は私の家から馬で半日かかる距離だったと記憶している。一度行ったら町の子供に苛められた嫌な思いもある場所。色々言いたい事はあるけど、取り敢えず重要な事を一つだけ。

「魔女を万能な存在と勘違いしないで。私達は…私は、特別な事は出来ない」

謝って無いような失礼過ぎる次期領主を、睨み付ける。

魔女だからって、それがどうしたっ！ つか、グレタって私のばあ様よ。

呆然とする二人を横目に、布団から起き上がって扉へと向かう。…いや、向かいたかった。生命の危機を感じ、恐る恐る振り返る。

今は頭を垂れた騎士と、苦笑いする次期領主しか頼れない。

「すみません、廁何処ですか」

一瞬の間が空いた。

「…ゲオルグ」

「はい」

クロードさんに静かに命じられたゲオルグさんが、案内してくれた。
道中は無言だった。

：緊張感が無くてすみません。

魔女、彼らと出会う。（後書き）

クロードとゲオルグ、同時に出てきたのに容姿の説明がゲオルグしか出なかった…。しかも雰囲気だけ。

…。

クロードはそれこそ金髪のボンボンです。少しだけ前髪を下ろしてありますが、他は後ろにいつてます。

魔女、騎士と話す（前書き）

お待たせ致しました

魔女、騎士と話す

長い道程だった。

やっと救いの場所に辿り着いた瞬間、今まで無言だったゲオルグさんが喋りだした。わざとか！

「今回の件は私に原因があります。クロード様に罪はありません」

ふせた長い睫毛に、憂いが伺える。

うわ、綺麗：じゃなくて！別に弁解するのはいいんだけど：そろそろ我慢の限界なんです。主にソレが。

解放を感じた瞬間に閉塞されると最高に焦れるよ！

ふう、とため息が出る。

「例え、あなたが原因だとしても誘拐の共犯者である事に変わりはありませんよ」

言い終えてから、しまったと口を閉じる。思わず、苛々して本音をぶちまけてしまった。

恐る恐るゲオルグさんを見れば、こちらを：静かに見つめてるー！

「：確かに、非合法な手段ではありませんでした。拐う、などという非人道的な手段で連れてきてしまい、大変申し訳なく思っています」

「はあ：」

心底申し訳なさそうに頭を垂らすくらいなら最初から謝って下さい。
今更過ぎます。

と、キツく言おうと思った。が、ついでに微妙に気になる「お願い」とは何なのか。何故、ゲオルグさんが原因なのか。よく解らないのだ。「魔女」に何を願うつもりなのか想像がつかない。

「ねえ、あなたが原因ってどういう事ですか？」

紅の瞳が躊躇を見せ、一瞬だけ苦渋を見せた。だが、直ぐにそれは隠されて。

「私は人間離れた力を持っています。岩をも砕く剛力、どんな動きをも感じとる知覚、疾風の如き瞬発力。…極めつけは驚異的な体力と回復力」

声音は何処と無く暗かった。

人は誰しも特異分野が一つあると言われている。一つだけ、人よりも優れていたり劣っていたり。特別に異なる能力が。

私の呼吸音が変わった事に直ぐに反応したのも納得。本気で驚いたもの…。

だが、ゲオルグさんの能力は…人間の特異領分から随分とはみ出しているようだ。

「…力を誰もが恐れました。血縁者も、友人も何もかもを失って―身一つで入った騎士学校で、同輩のクロード様に救い上げて頂いたのです」

「…願いは「力の消去」ですか」

「はい」

もし消去出来たとしても、一度失った縁を再び結ぶのは難しい事だ。

皮肉にも、その力があつたからこそクロードさんとの縁が出来たようだが。力を失って、二人の関係は何処へ向かうのかも解らないのに。

「力は使う為にある、クロード様はそう仰って下さいましたが…。
この平和な世に、余りある力は必要無い。何の為でも無い力を持っているのは…酷く、重い」

軽く前髪をかきあげて、眉を歪める。吐き出されたこっちも「重」って反応したい。…きつと、私には想像出来ない苦悩を沢山抱えて来たのだろう。

…誘拐した時点で同情の余地は無いけど。

一つ、その力に心当たりがある。

「ゲオルグさん、私はあなたの力にはなれない。ただ、その力が何の為にあるかは解る」

紅の瞳に私が映る。

困惑を滲ませたソレに視線を合わせ、告げようと口を開く。

「あなたは――」

しかし、肝心な時に話が遮断されるのは御約束。

視界の端に映った小さな影が、直ぐ傍を駆け抜けてゲオルグさんを突き飛ばした。

「ッ、」

凄まじい速度に反応は出来たようだが、対処しきれなかったようで

：ゲオルグさんは壁に叩きつけられた。

苦悶の声を出している騎士に青ざめたが、彼を隠す様に私の視界は埋め尽くされた。

——一人の胸板によって。

「無事で良かった。：エレ」

強く抱き締められてから、額にちゅ、と口付けがふってきた。
そこからは安堵と、暖かな気持ち伝わってきて。

「——迎えに来たよ。帰ろう？」

「：レイさん！」

迎えに来てくれた祖母の『魔女騎士』の穏やかな笑みによって、一瞬前にゲオルグさんがすっ飛んだ記憶もすっ飛んだ。

：一瞬だけ。

魔女、騎士と話す（後書き）

ゲオルグさんが人間離れしている筈なのに、呆気なくすっ飛ばされた件については次回。

主人公の生理現象についても次回。

騎士、魔女が為に在る。（前書き）

予想を裏切らない展開かと。

騎士、魔女が為に在る。

一瞬後。

ブツ飛ばされたゲオルグさんの事を思い出し、彼の様子を見ようと顔を動かす。否、正式には動かそうとした。

「駄目だよ？ 私以外の人を見ちゃあ、ね」

間近でニツコリ、と後光がさす笑みで言われて、待ったをかけられた。それどころじゃないと知っているのに、思わず赤面しそうになった頬を隠す。

：柔らかな金髪、穏やかで優しい碧眼は：まさしくお姫様を助けに来た王子様に見えるだろう。だが！彼女、レイナ・ワルターさんは祖母の『魔女騎士』であり、王子様ではない。

「それにしても：情けない」

はあ、と軽く溜め息が頭上にかかる。

：どうしたのやら。私の疑問視を見透かしたかの如く、レイさんは答えをくれた。

「同じ魔女騎士だと言うのに鍛えが足りない、呆気なさすぎて呆れたね」

「あー、やっぱり魔女騎士だったんだ」

ゲオルグさんの話を聞いて私なりの予想はつけていたが、大当たりだったようだ。

王子様ならぬレイさんの超人的力を見てきた為、人間の領分を超えた特異能力を聞いて気づいた。

だが、本人は自身が魔女騎士と知らずに、魔女を守る為の力を魔女に消して貰おうとしている。皮肉というか、笑えない現実だ。

「――魔女、騎士…？」

ゲオルグさんがふらつきながらも立ち上がる。紅の瞳に困惑を宿して。

嗚呼、やはり知らなかったのだ。

説明しようと口を開いたが、レイさんの人差し指に押し止められた。視線をやれば、ウインクを超越される。意味は「任せて」なのであろう。

「貴殿は魔女を守るための存在、魔女騎士なんだよ。」

「魔女を、守る…」

そ。とゲオルグさんの呆然とした呟きを肯定して、レイさんは魔女騎士の説明をした。超人的な力、存在の意味。それらを聞いていく内に、ゲオルグさんの表情は明るいものに変わっていった。…自らの力が誰が為に有るのか解ったからであろうか。

「…魔女騎士の力を、魔女を恨まないの？力があなたの人生を滅茶苦茶にしたのに？」

レイさんの胸から何とか脱出し、向き直ってから問う。彼は全てを失った。クロードさんが居なければ、彼は――独りだった。

私が映る紅の瞳に、微かな翳りが出た。

「全くと言えば嘘になります。…ただ、それ以上に自らの力を捧げ

る相手が、存在する事に喜びを感じます」

翳りが消え、まるで最愛の女性に愛を囁くような笑みでゲオルグさんは告げた。

この騎士を持った魔女は苦勞する、と他人事だからこそ感じる。蛸の如く吸い付いて離れないぞ、きっと。

「そ、そう。良かったね。じゃ、私のエレは連れ帰るから」

些か引きつった声で、レイさんが私の肩に手を回した。私と同じように危険を察知したみたいだ。危険は回避するに限る。

レイさんと目が合い、頷き合う。お互いに意志疎通ができた。選択肢は「逃げる」だ。

そうと決まれば、素早くレイさんに横抱きにされたので、首に手を回そうとした。その時、だった。

「――昔、このシュトビネー領で苛められていた少女を見ました」

突然、ゲオルグさんが語り始める。ここで無視してさっさと帰れば良かったのだが、私もレイさんも動きを止めてしまった。

「私は、少女を助けたいと強く思った。すると、不思議と力が沸き上がって来たのです。少女を逃がし、苛めの主犯を叩きのめしました。――少女は魔女で、この瞬間に彼女の魔女騎士として目覚めたのだと、推測出来ます」

ピン、と来た。…来てしまった。

身に憶えが、有る。

このシュトビネー領で町の子供に苛められた私を、一人の少年が救ってくれた。私は逃げるとき、何かを言った。

…。そうだ、「ありがとう、私はエレよ。また会えたら、御礼を必ず！」とか言った。…。いや、似たような違う話かもしれない。

「彼女は「エレ」と名を教えて下さった。必ず御礼をすると言って」
熱のこもった紅の視線が、突き刺さる。

うん！違わなかった！…そっか、私の魔女騎士は現れなかったんじゃないのね。

居たけど、側にいなかったって訳ね。成る程！
そして、急展開にショートした脳味噌に、トドメが落ちた。

「御礼代わりに…私の魔女、エレ様。私を――ゲオルグ・アークランドを、貴女の騎士にして下さい」

そう言って、ゲオルグさんは颯爽と接近し、レイさんの首に回しかけた私の片手を浚った。数秒後、彼の唇が私の手に落ちる。

…思考回路が真っ白になった。

取り敢えず、言いたいことが幾つか。

…クロードさんはいいの？あなた、クロードさんの護衛騎士なんじゃない？

…キャラ変わってませんか？

…誘拐犯から魔女騎士にジョブチェンジですか？

あと、最後に大事な事。

トイレに行かせて下さい、そろそろきついです。

**騎士、魔女が為に在る。
(後書き)**

別名、ゲオルグ崩壊の巻。
そして我慢の子、エレ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621x/>

魔女騎士

2011年11月19日13時17分発行